

# 観 音 寺

昭和63年7月

第9号

年2回発行

編集発行

小出真行



悟りは人の心の中にある  
依って真に自分の心を知  
るのを悟りと云うのである。

としとれば(2)

手はふるう

足はよろめく

歯はぬける

耳はきこえず

目はうとくなる

仙崖六歌仙



近頃では、お老寄も足が弱くなると杖があり、  
歯が抜けても立派な入歯がすぐ出来ます。耳に  
は補聴器というものが耳を助けてくれますし、  
目にはメガネがありますので、普段の生活には  
あまり影響がなくなってきました。でも、  
あまりこうしたものを使っていますからと安心し  
ないで下さい。本当は使うよりも……。  
しかし、年とともにままならなくなるでしょ  
うから「他のもののお助けは、お恵をいただい  
た」と、たしなんで行くことが老を重ねた人な  
らではの味わいというものでしょう。

般若心経



故知般若波羅蜜多 是大神呪

是大明呪 是無上呪 是無等等呪  
能除一切苦 真実不虛

(故に知る、般若波羅蜜多はこれ大神呪なり、これ大明呪なり、これ無上呪なり、これ無等等呪なり、よく一切の苦を除き、真実にして虚からず)

「故知般若波羅蜜多 是大神呪」とは

摩訶般若波羅蜜多と般若の知恵を口で唱えれば「是れ大神呪」―智恵の完成の大いなる真言―真実の言葉であることは申すまでもありません。「大神呪」とは、神通自在の神の言葉です。しかし、神がかり的な理解になるのを案じた白隠禪師は

「貴ふべし、自性の大神呪」とされています。自性とは「超越的無意識」のことで、自覚して

いる人は少ないですが、無意識のまま誰もが保有している「ころ」のことです。

「呪」には二つの原語がありますが、

一つは「マハーマントラ」で「悪法をさえぎり、善をまもる秘密の言句」で呪あるいは真言と訳されます。この「秘密の言句」が「不思議な靈力」として「のろい」とか「まじない」といった先入観をもたらしたものと思われれます。もう一つは「ダーラニー」で音訳しますと

「陀羅尼」と書きます。よく子供が腹痛を起すと私は、「陀羅尼助」という薬を飲ませます。が、実によく効く薬です。この「陀羅尼助」ですが、もとは修行の為、睡気を防ぐために口に含んだ苦味薬だそうです。この「陀羅尼」の意味は「能持する」とか「保持する」ということで「持ちつづける」「保有している」ということです。従って、神秘なはたらきは、外だけではなく自分の中にも保たれているのです。それに気付かしめるのですから「般若波羅蜜多」はまさに大神呪なのです。

従って「大神呪」とは、

真言の働きを示しています、これは心の迷いの闇を破り、十方を明るく照らす働きで「般若波羅蜜」をたたえているのです。

「無上呪」とは、

他に較べるものがない最上のはたらきでありますのでこのようにたたえているのです。この「般若波羅蜜」は私たちが超越的意識(自性)として内面に保有していますので無上、最上であり、それを呼びさます声であり言葉ですので「無上呪」なのです。

無上というと、私達は上のほうばかり見ます(尊いものは上のほうにばかりあると思いがちです)自分の足もと、即ち自分を見つめ泥んこの自分の中にある尊い心と呼びさしますので「無上呪」とたたえているのです。

「無等等呪」とは、

「無上」をさらに賛嘆した言葉ですので「無比」といってもいいでしょう。ともに比較するものが何もなく、比較を絶すること、この宇宙に充滿してないところはどこにもないということ、宇宙そのものに等しいという意味において「平等」といっているのです。つまり、それ自体とか、絶対の存在なのです。それは使い慣れた言葉でいいますと、私達の内に保有するとともに外にも広く行きわたっている。超越的存在(仏性)ということ、

「能除一切苦、真実小虚」とは、

この般若の智慧、つまり空を知る智慧が身に  
つけば「能く一切の苦を除く」ことが出来るの  
です。私達人間は一日中怒ったり泣いたりする  
事も笑ったりする事もありません。何かが因と  
なり縁となつてそういう状態を引き起こしてい  
るのです。生まれながらの善人もないし、悪人  
もありませんから、ただ因と縁のよしあしによつ  
てそうなるので、つまり「空なる存在」なので  
す。従つてそのことに気付くのが般若の智慧な  
のです。それは、何かに執着すると足もとをす  
くわれる迷いのもつたので、五官（目、耳、  
鼻、舌、皮膚）の対象となるものは、全て「う  
つろ（空）」なもので、ただ因と縁によつてそ  
のように見えているのであると覚るのです。

要約しますと、それゆえに人は知るのです。  
智慧の完成の大きいなる真言、大きいなるさとの  
真言、無上の真言、無比の真言は、すべての苦  
しみを鎮めるものであり、偽りがなければ真実  
であると。



## 大師の

### ことば

「いわゆる己が臃脚をかくして、  
他の腫足をあらわす者なり。」

#### 秘蔵宝鑑



人というものは、立派な教えを本で読んだり  
聞いたりして物事の善し悪しはよく知っていま  
すが、随分前に流行した歌詞に「分かっちゃい  
るけど止められない」と、あるようにその行為  
となるとまるでだらしがなくなってしまう事が  
多いものです。口では簡単に言えますので偉そ  
うなことをよく言いますが、思いや行動となり  
ますと無茶苦茶を平気で行い、他の人の心をひ  
どく傷つけたりします。

それはちょうど諺にいう

「親を大切にせよ、と説いた考経を手にささ  
げながら、片手で母親の顔をなぐる」ようなも  
のです。

そういう人は、自分が道理や正しい教えにそ

むいた行為をしていようと露とも反省せず、  
かえって他の人の過ちをあたかも毛を吹いて、  
ことさらに大きくしたり、小さな傷を求めて自  
分を正当化し相手を口きたなくのしるもので  
す。いわゆる己のうみの出ている汚い足をかく  
して、知らぬ顔の半兵衛をきめこみ、他人の少  
し張れた足を大げさに指摘し吹聴し、つつきま  
わるようなものなのです。これが現実の人間の  
有り方で、自分にとって不利なことはかくして  
相手の不利になることを巧みに宣伝し、相手を  
陥れようとするのが現実で、人のいうことは心  
の表と裏は必ず一致しているなんて甘く考えて  
いますと、とんでもない「しっぺ返し」がくる  
という世智辛い世の中になりつつあります。

従つて大人の世界は「あいつは本当に何を考  
えて何を狙っているのか」というお互い腹の深  
り合いになることもしばしばです。といひます  
のも、他人の腹のなかを見通して読めなくては  
無事に渡っていけないのがこの世の実情だそ  
うです。本当に恐い世の中になったものです。

この恐い現実を十分にわきまえたうえで、  
これらに負けず、正義と真の慈悲をこの世に行  
える人を真の大丈夫というのでしょうか。  
あなたはどうか。

やさしい母親は  
「思いやり」を育てる

豊かな情操を育てるには、  
ただ漠然と動物を飼育  
したり草花の栽培を  
したり、音楽や絵画を



習わせれば、自然に身に付くように考えている  
人が多く見受けられます。確かに様々な現象を  
目で見、肌で感じ経験することは素晴らしいの  
ですが……。それ以前に、この豊かな情操を  
育てる一番のポイントは「思いやり」の心だと  
思います。

「思いやり」とは、相手の立場に立って物事  
を考え、相手の気持ちを汲み取る力なのです。

これは、共感的理解とも呼べるでしょう。「思  
いやり」のある母親は、子供の立場に立って考  
え、子供の気持ちを汲み取る力がありますので、  
子供を叱るようなことはあまりありませんから  
「慈母」という言葉に相應しいイメージの持ち  
主ですが、子供を叱ることの多い母親は、自分  
本位の面が多く、子供にとって「鬼母」に見え  
るかもしれません。

このような母親の前では、子供が落ち着かな  
くなるのも当然ともいえます。「思いやり」の

ある子供は、「思いやり」のある母親によって  
育ちますので、「思いやり」のある子供に育て  
たいならば、まず自分自身が「思いやり」のあ  
る人間になる努力が必要でしょう。

乳児期（赤ちゃん）の子供は、体で甘えたい  
時に母親がやさしくそれを受け入れ抱き上げま  
すと、さつきまで火のついた様に泣いていた赤  
ん坊もピタリと泣き止みますし、「人見知り」  
の時期では、情緒が順調に発達し、最も信頼で  
きる人の暖かいイメージが子供の心に植えつけ  
られますので、母親の傍にすがりついて離れた  
がりません。

一〜二才位になりますと、さらにイメージを  
心に刻み込もうとしますので、何かにつけて母  
親の膝の上に乗ろうとしますし、眠くなったり  
疲れたり、不安があるときなど、受け入れられ  
ることによって情緒が安定してくるのです。

この時期に母親の暖かいイメージが心に刻み  
込まれていない子供は、しっかり者の様に見え  
ても不安定な情緒を持っていますので「思いや  
り」が育ちません。

その結果、三才以後になって幼稚園などに通

い始めますと、攻撃的な行動が目立ってきます。  
もし、攻撃的な子供（いじめっ子）がいたら、  
母子関係について検討してみる必要があるのだ  
す。しかし、攻撃的な行動さえも現わさない、  
表情に乏しい子供は、思春期以後に、突発的に  
異常行動を現わしたり社会を騒がせるような結  
果を招くこともありますので、気をつけなけれ  
ばなりません。

先日の新聞で、母親の愛を知らずに育ち、非  
行を重ね失敗した（過ちを犯す）記事を目にし  
ましたが、やはり一概に言えません、この背  
景にも母子間の心の歯車がかみ合っていないかっ  
たのではないのでしょうか。

要するに何が一番大切なのかと申しますと、  
子供からの体での甘えを充分にキャッチし、そ  
れを理解し助長して自主性を育てることが、情  
操の豊かな子供を育てる秘訣ではないでしょ  
うか。

だって、母親の暖かいイメージが子供の心に  
刻み込まれていれば、母親を「思いやり」ます  
ので、母親を悲しませるようなことは出来ない  
はずですからね。